

「教員養成学講究」及び「大学教授学講究」 における博士課程後期 1 年次生の取組み報告

山田 直之
(広島大学大学院・D1)

1. 報告の手順と目的

教職課程担当教員養成プログラムでは、博士課程後期 1 年次生を対象に 2 つの授業を開講している。前期に開講される「教員養成学講究」と、後期に開講される「大学教授学講究」がそれである。本報告では、(2.) それぞれの授業の概要を示した後に、(3.) 今年度の履修者 8 名が取組んだテーマを紹介し、(4.) まとめにかえて、両授業を踏まえた反省と今後の展望を記す。

両授業での取組みを反省的に報告することで、博士課程後期 2 年次、3 年次で取組むプログラム内容と、両授業との関係がより明確になれば幸いである。

2. 「教員養成学講究」及び「大学教授学講究」の授業概要

前期に開講される「教員養成学講究」(担当教員は河野和清先生、山崎博敏先生)においては、博士課程前期までに修得した教職に関する知識を基に、国内外の教員養成の制度と教員養成プログラムについて学修した。加えて、我が国の特徴的な大学の教育学部の教員養成カリキュラムと、授業のシラバスおよび使用教科書等を分析し、比較考察を行なった。加えて、受講生個々人の関心に基づき、各人が希望する授業科目について全 15 回のシラバス作成を行なった(表 1.)。

後期に開講される「大学教授学講究」(担当教員は久井英輔先生、深澤広明先生)においては、主として大学での授業を担当する上で必要な教育の理論と実践技法を習得することを目的に、受講生個々人が興味のある領域で調査、研究を行ない、発表や討議がなされた。演習形式の授業を通じて、各受講生が 3 回の研究発表を行ない、その成果物として学期末に最終レポートを作成した(表 1.)。

3. 受講生が取組んだテーマ

右のページに掲載した表(表 1.)は、平成 27 年度履修生が取組んだテーマの一覧である。今年度は 8 名が新たにプログラムに参加し、前後期の授業を受講した。例年に比べ受講生が多かったため、多様な関心から「大学で教えるということ」を考えることができたと思われる。特に「大学教授学講究」において取組んだ課題に関しては、高等教育という共通のフィールド内で、教授学的、比較教育学的、社会学的、哲学的と言えるような多様な観点からのディスカッションがなされた。領域横断的なディスカッションにおいても、学問と教育の関係や、高等教育と質保障の関係に関するテーマなど、共通のテーマでディスカッションを行えたことは興味深かった。

4. 反省と今後の展望

教職課程担当教員養成プログラムの履修生は、博士課程後期の3年間で、教職課程を担当するための基礎的な力量の形成を目指す（「教職課程担当教員養成プログラム 平成27年度概要」より）。1年次で履修した授業を、2年次以降に行う教壇実習に生かすためには、両授業を通じて大学教員としての「授業観」を形成することが求められよう。ここでの「授業観」は、「自らが勤務する大学において授業がどうあるべきか」という問いに対する考え」程度の意味である。この「授業観」がない限り、指導案を作成することはできないだろう。つまり、教壇実習を実りあるものにすることもできないと考えられる。

その点、前後期に受講した両授業は、「授業観」を形成するには格好の材料を用意していたように思われる。例えば「教員養成学講究」で扱った他大学の「教職に関する科目」のシラバスやそこで使用される教科書には、担当教員の「授業観」が如実にあらわれており、それらの授業の特色や課題について意見交換をしたことは、自らの授業に対する考え方を養うことに他ならないからである。また、「大学教授学講究」において学んだ「大学における授業」のあり方についての基本的な原理や実践上の課題を理解する取り組みや、教育目標や講義・演習などの授業形態に応じた教授スタイルの比較検討も、受講生の「授業観」形成に直結するものであったと反省できる。

しかし、受講生らが前後期に開講された両授業を、教職課程担当教員養成プログラム全体のなかでいかに位置づけていたかには個人差があろう。博士課程後期2年次、3年次で行う教壇実習と両授業との関連を意識することが、プログラム全体にとっては有益であると考えられる。

表 1.□「教員養成学講究」作成シラバスと「大学教授学講究」レポートテーマ

来年度以降、両授業と教壇実習とを関係づける仕掛けは（例え「授業観」でなくとも）必要のように思われる。両授業と教壇実習を架橋する視点は、プログラム履修生が教壇実習を行う上での明確な基礎となるだろう。加えて、既に前後期の授業を終えた他学年のプログラム履修者や、来年度の授業履修者にも教壇実習に対する理解を深める機会を提供できよう。

| | 教員養成学講究□ | 大学教授学講究□ |
|---|---------------------|---|
| A | 教育方法技術論シラバス作成 | オープンエデュケーションがもたらす 反転授業の可能性 |
| B | 教職課程論シラバス作成 | 「高度専門職業人養成としての教職課程の質保証—3つの知に着目した授業分析を通して— |
| C | 「教育の理念、歴史と思想」シラバス作成 | 大学の教職科目における教授法の探究 — 「教職に関する科目」の特質に注目して |
| D | 「道徳教育」シラバス作成 | 宇佐美寛「授業論」の今日的意義—「宇佐美哲学」と大学講義批判を中心に |
| E | 「特別活動」指導法シラバス作成 | 「教育イデオロギー」をめぐる大学院生のストラテジー |
| F | 「教育の理念、歴史と思想」シラバス作成 | 障害学生支援に関わる学生の「学び」に関する考察：物語を用いた授業実践を手がかりに |
| G | 「教育の理念、歴史と思想」シラバス作成 | 大学生の協同学習における教員の役割 —LTD 学習法理論を中心に |
| H | 「教育の理念、歴史と思想」シラバス作成 | アカデミック・ライティング支援における「添削」概念の批判的検討—広島大学ライティング・センターの取組みから |